翻訳

パイデイア（その XV）

――デモステネス：ポリスの死闘とその変容――

G・ハイエット
村島義彦 訳

デモステネスは、ルネサンスでその息を吹き返したが、以来、現代の最初の校訂者が〝そう呼んだ〟ような人物とみなされてきた。ほかでもない、圧政に抗する能弁の旗手として、ギリシア人の目を〝自由〟へと見開かせた――これが、かれの通り相場なのである。ナポレオンの手がヨーロッパの上に重くのしかかった時、ドイツの言語学者で人文主義者のフリードリッヒ・ヤコブスは、民族的な独立精神を強化するべく、デモステネスの演説を翻訳し、第一次大戦が終了してまもなく、フランスの政治家のクレマンソーは、デモステネスをめぐる著作を慌ただしくまとめ上げた。この著作には、ドイツ人という〝今日のマケドニア人〟に抗したフランス人の灼熱の雄弁が滔々と溢れかえり、パリの〝今日のアテナイ人〟に向けて、こう切々と訴えられていた。洗練に勉めたあげく、野蛮な敵に対抗するに足る生存意欲も活力も喪失した、芸術家や金利生活者等の無気力な人士にだけはくれぐれも成り下がってくれるな、と。そこには、デモステネス自身のあまねく弁論的工夫もたっぷりと盛り込まれ、これを介して、長らく死に絶えていたこの愛国者への新たな礼賛が、ラテン文化の中に改めて盛り上がった。かれの祭壇には、往時の古典主義の炎が、これを最後として今一度赤々と燃え上がった。ところで、それに僅かに先立って、ドイツの学者の手で『古えの法律国家（アウス・アイナー・アルテン・アドボカーテンレプブリック）』という、まことにふざけた題名を具えた別の本も出版された。これが狙いとしたのは、あまねく事例をすべからく合計し、デモステネスの評判を永久に葬り去ることであった。おそらくは、力強い弁論家で偉大な扇動家でもあるデモステネスを大々的に礼賛した古典主義者の〝身贔屓〟――当人は、アカデミックな弁論術の手で〝聖人の列〟に加えられた――に対する、手厳しい反発の一世紀を存分に反映してのことにちがいない。この本は、紛うかたなき〝戦いの書〟で、高度に扇動的といってよく、あらゆる事実を容赦のないメスで切り刻み、真実を捻じ曲げて戯画化していたが、これも、およそ百年ばかり前、歴史に対する新たな姿勢が登場して以来、デモステネスをめぐる歴史家の評価が辿ってきた下降線の単なる最低点にすぎなかった。

新たな歴史姿勢を古典の分野で代表するニーバールは、わけても熱心にデモステネスを礼賛した一人であったが、ドロイセンは逆に、そうしたデモステネスの経歴と政策を容赦なく批判した。その口火は、画期的ともいえる〝ヘレニズム世界の発見〟にちがいない。これまでのギリシア史は、ポリスの政治的自由がカイロネイアの敗戦であらかた失われ、劇的な〝幕切れ〟となるのが常であった。そこでのデモステネス像は、

ヘラスの墓に向けて追悼演説を行なう〝最後のギリシアの政治家〟といったものであった。しかるに今や唐突に幕が上がって、新たな〝大ドラマ〟が開示された。すなわち、アレキサンダーによるペルシア帝国の征服に始まるヘレニズム時代こそ、実に、ギリシアによる世界支配が政治的にも精神的にも成し遂げられた時代にほかならない、というドラマである。視野そのものが転じて、コスモポリタンで普遍的な局面に向けたギリシア文化の絶えざる発展が――外的にも内的にも――露わとなった。全体のバランスが変じて、デモステネスの偉大さも、ごく小さくて限定されたものと思われるようになり、かれが属した時代も、みずからの重要性を錯覚し、〝栄えある祖先たち〟といった誇張的記憶を握りしめて離さない、文字通りのアナクロニズムを生き続けた時代だと判明した。かれにしても同時代の面々にしても、父親たちの偉業を――過去の遺物であるのに――みずからの時代に甦らせようと躍起になっていたように思われた。デモステネスへの批判は、さらに辛辣の度を増した。歴史家たちはこれまで、デモステネスの政治基準を好意的に受け容れてきたが、そうした批判は、これらの捨て去りからスタートした。かれの時代に言及した同時代の面々の報告に、政治基準に関わるものが目にされなかったからである。ざっとこのように、当人の〝政治家としての資質〟に疑義を呈したのち、批判はさらに歩を進めて、かれの〝人となり〟にも容赦のないメスを入れた。それと相前後して、イソクラテスやアイスキネスなどのライバルたちの評価が高まりはじめた。かれらは、アテナイの未来に向けた希望をタイミングよく捨て去って、それに関わる戦いなどきっぱりと諦めるべきだと同胞の耳に囁きかけたからである。成功したか否かは、よくあるように、歴史的業績のバロメーターとなった。存命中のデモステネスにはライバルがいて、そうした連中は、今日の大学教授のような〝先見の明〟に溢れていた――この点を目にして、世の学者たちはそっと胸を撫で下ろした。

これらの批判はあまりに踏み出しすぎていたが、ともあれ、デモステネスの一般像を修正すべき時期は訪れていた。デモステネス、アイスキネス、イソクラテスの〝人となり〟に対する通例の評価を抜本的に改めるのは、常識と自然感情に掉さすに等しく、心理学的に起こりそうもなかったが、それを別にするなら、ドロイセンによる〝ヘレニズム世界の発見〟をへて、前四世紀をめぐる知識は今や画期的に進展した。そのような進展の口火は〝政治〟でなく、あの批判期の知的動向に投じられた〝新たな光〟にほかならない。この光は、政治的動向がいかに密接にギリシア思想やギリシア文化の動向と繋がり合っているか、を照らし出したからである。かつては〝完璧に区画され〟ていると思われていた諸々の世界――たとえば政治史と哲学、ジャーナリズムと弁論術などの――が、今やすべからく単一の有機体の各器官にほかならず、それぞれが国家生活の歩みにしっかり与っている、とみなされている。トキュディデスの着想になる〝歴史的必然〟は、今や、ごく一般にそうされているよりも――とりわけ政治史の分野で――いっそう広く解釈されてよいだろう。デモステネス自身は、ギリシアのポリスの崩壊過程で登場した〝歴史現象〟にほかならないが、そうした登場を、当人の個人的性格や実際政治面の成功からもっぱらに読み解くのは、今日では粗雑きわまる読み解きと思われてならない。かれは、当時の世を動かす諸力に激しく抵抗したが、これも、個人を超えた〝法〟の履行以外の何ものでもない。あまねく国家は、みずからの自然的性向にも適い、みずからの歴史における最高の事績にも責任を負った〝生活の型〟を自身の手で形造ったが、これを維持するには、この法を用いずには済まないのである。

ホメロスからアレキサンダーにいたる数世紀を通して、ギリシア史における基本項目は〝ポリス〟を措いてなく、政治生活と精神生活を盛り

込むこの〝器〟は、きわめて早い時期に確立され、以後、完全に捨て去られることはなかった。ポリスは、ギリシア民族が具えていた溢れる可能性のすべてを、内的生活と外的生活の両面にわたって見事に開花させ、その形態たるや、刻々と変化するギリシアの風景に劣らず多彩なものであった。前五世紀を迎えてギリシア人が自身の精神的な民族性に目覚め、いっそう小規模な政治単位が、互いに結集してもっと大規模な同盟に向かい始めた後ですら、ポリスという独立存在は、なおも〝辺境〟のままに留まっていた――この辺境は、遅かれ早かれ、新しい趨勢をせき止めて〝国家主義〟に向かわないわけにはいかない――。個々のポリスは自身の独立をいつまで保てたか、という問題は、ペリクレス指揮下の帝国主義的なアテナイ人の手で、アテナイの同盟国が情け容赦もなく押し潰されて隷属を強いられ、荒々しく棚上げされてしまったが、以来、満足のいく解答をいまだに見い出していない。ペロポネソス戦争が幕を下ろして、ギリシアは、それまでのアテナイ人に替わってスパルタ人に掌握されたが、後者は、自身の支配権を確立する上でも、個々のポリスの自主独立を〝形の上〟で認めないわけにはいかなかった。ギリシアの各ポリスは、コリントス戦争において宗主国のスパルタにはじめて反旗を翻し、アンタルキダスの平和でその自主独立を承認された。もっとも、ギリシアのポリスはすべからく自主独立を手放すべきでない、というこの定式は、スパルタにも好都合であった。それが意味したのは、スパルタ以外のポリスに主導されたスパルタへの反同盟などできるわけがない、だったからである。けれども、スパルタ自身が統括の手綱を引き締めて個々のポリスの自由を侵害したとき、結果として生じたのは、みずからの支配の崩れ去りであった。そののち、ギリシアのポリスのいずれかが、単独で、他のポリスへの絶対的支配を確立することはなかった。言葉を換えるなら、ギリシア人には、わがポリスの自主独立を捨て去るなど想像も及ばず、その程度たるや、今日のわれわれが自身の国民国家を捨て去って、いっそう包括的な国家形態の採択に〝現実に〟思い巡らせた以上にそうであった。

デモステネスが青年時代を迎えたのは、アテナイが、ペロポネソス戦争の壊滅的な敗北から立ち直りつつあった時期にあたる。時代の哲学思想――プラトンに具体化された――は、国家を道徳的に築き直すにはいかにすべきか、という問題の解き明かしに持てるエネルギーのすべてを注ぎ込んだが、当時のアテナイ国家は、みずからの弱点を克服して〝動きの自由〟を手にし、権力の徐々なる回復に向けた道を着実に歩んでいた。権力が交代すると共感も変容しないわけにはいかない――トキュディデスのこの予言は、すべからく、あまりにも即座に成就された。アテナイは、かつてのスパルタの同盟国であったテバイとコリントスに支えられて、ポリス間での自身の地位をゆっくりと回復し、さらにはペルシアの財政的援助を介して、終戦後に破壊を命じられた数々の要塞も再建した。次いで、回復の第二段階がこれに続いた。テバイがスパルタから離脱し、アテナイには、第二次海軍同盟を結成する好機が訪れたからである。そこでアテナイは、まことに抜け目なく、第一次海軍同盟を解体に導いた〝傲慢な政策〟を避け、あまたの同盟国と密接な拠りを取り戻した。この第二次海軍同盟を導いたのは、ティモテウス、シャブリアス、イピクラテス、カリストラトスなど著名な軍人や政治家の面々であった。同盟が結成されてまもなく、アテナイは、七年戦争でテバイに組みし、スパルタを相手に勇敢かつ献身的に矛を揮った。この戦争は、前三七一年の平和をもって上々の終結をみ、アテナイの海上支配は確かなものとなって、新しい同盟は、国際的な同意を得て最終的に公認された。

アテナイの若者たちは、あるいは前向きに哲学の研究に没頭し、あるいは後ろ向きに冒険やスポーツに空しく時を費やしていたが、すべから

く〝歴史の巨大な流れ〟にさらい取られた。ギリシアの政治生活を主導するように、今一度、舞台の前面にアテナイを押し出したように思われた〝流れ〟に、である。かれらは、かつての若者たち――ペロポネソス戦争とその敗北、さらには国の崩壊等々の深刻な問題に身を晒しつつ必死に奮闘した――とは別の世代に属していた。プラトンが『ゴルギアス』をまとめたのは、かれらに呼びかけて戦いに加わらせるためで、事実、前四世紀の始めの十年間の若者たちには、新しい社会の築き手であるという実感がしっかりと具わっていた。のちにプラトンは『テアイテトス』をまとめたが、そこに描かれた〝賢人〟の姿は、この世から益々その身を退いて、数学や天文学をめぐる象牙の塔の思索にひたすら閉じこもり、現実の政治活動のすべてに懐疑的に背を向ける、といったものであった。若い世代はしかし、荒々しい政治の渦に引き寄せられ、プラトンにみる純探求型の生活に向けた専念など、小都市や辺境の国々からの移住者――たとえばアリストテレス、クセノクラテス、ヘラクレイデス、オプスのピリポス等々――に委ねて憚らなかった。イソクラテスの学校は、プラトンの学園アカデメイアとは趣を異にして、一連の実際政治家のグループを輩出し、中でもティモテウスはとりわけ有名であった。イソクラテスの友人にして卓抜の弟子でもあったこの人物は、軍人かつ政治家として新たな海軍同盟を統括したが、若い世代を実際に鍛え上げたのは、それでも現実の党派政治であり、法廷の弁論であり、公的集会（＝民会）の演説であった。デモステネスも、うら若い頃に、家庭教師に導かれて密かに法廷に足を運び、カリストラトスの大演説を耳にしていた。この演説は、オロポスの件の自己弁護に終始したが、それを介してカリストラトスは、今一度、身の破滅を免れたのだった。

　このような歴史的逸話は十分に起りうることで、そこには、新しい世代の精神がしっかりと示されていた。ここから読み取れるのは、奪われた家屋敷や遺産をめぐる心労――わずか二十歳時の最初の演説を満たしていた――もさることながら、デモステネスの本当の関心がどこにあったか、であるだろう。かれの〝人となり〟は、出来事の趨勢に導かれて、政治家タイプになることを運命付けられていたが、生涯の歩みを定めたのは、みずからの〝手本〟と仰いだ偉人たち、すなわち、第二次海軍同盟を結成した面々であった。そうした歩みの目ざすところは、アテナイが、政治的栄光の頂点に位置した世紀に手にしていた〝偉大さ〟――プラトンの哲学的批判を介して、今や、いくぶんは色褪せていた――を目下の時代に復活させ、いうならば〝過去の理想〟の手で〝現在の元気〟を回復させることを措いてない。そうした栄光が塵芥に帰していく様を目にするのは、身を焦がす煩悶以外の何ものでもなかったが、これも、単なる無駄には終わらなかった。戦後世代は、挫折の理由を理解しようと暗闇の只中で悪戦苦闘し、ついに、もしも過去が繰り返されてならないなら、失われてならない〝確かな知識〟をしっかりと掴み取ったからである。冷静で混じり気のないこの知識を、アテナイ帝国主義という陶酔的な古いワインにいくらかでも注ぎ込むのは若者たちに課された仕事で、かれらは、新しい時代とうまくやっていきたいなら、これ以外の道を選べなかった。新しい時代と前五世紀の差、さらには、第二次海軍同盟と第一次海軍同盟の差は、つまるところ、道徳的反省と政治的反省を怠らない〝新しい精神〟の有無にあった。政治的復旧に向けた前四世紀の運動は、まことに理想主義的で文芸的となったが、これも〝理の当然〟というほかはない。そのような精神は、エネルギーに溢れた以前の世紀には目にされなかった。政治的雄弁が〝偉大な文芸様式〟にまで発展できたのも、デモステネスの時代という〝アテナイの小春日和〟を背景としたからにちがいない。デモステネスは、弁論家としての自己訓練に明け暮れていた折、トキュディデスをわけても熱心に研究した、

という伝承は、あまたの事実ともピタリと合致する。もっとも、伝えられている処に反して、ペリクレスの政治演説を自身の手本に仰ぐことはできなかった。ペリクレスの演説は、文学作品として正式に出版されず、残存もしていなかったからである。トキュディデスに登場する演説は、わずかに生き残った、偉大な時代から響いてくるアテナイの政治的雄弁の〝木霊〟にほかならない。それらは、様式自体の芸術的・知的な完璧性や盛られた思想内容の豊かさの点で、当時の政治的雄弁をすべからく凌駕していた。トキュディデスの演説にみられる哲学的な深みと芸術的な優雅さに、口にされる言葉の迫力としなやかさを織り交ぜた類まれな〝文学様式〟を造り上げ、弁論術的説得の最大の本質要因ともいうべき〝話し手〟と〝聴き手〟の活き活きした情感の交流を文学の中に再現したのは、ひとりデモステネスのみであった。

カリストラトスの大演説を耳にして十二年後、いよいよデモステネスが演壇に足を踏み入れたとき、政治の状況は完全に一変していた。アテナイとその盟友国の間で繰り広げられた戦争は、すでに終わりを告げて、アテナイは、この上なく重要な盟友たちを今一度失うことになった。第二次海軍同盟は、あのように輝かしい希望の下に結成されたのに、もろくも壊れ去った。盟友たちの大半がこう考えたからである、同盟のはたらきは、スパルタの支配の転覆でその役割を終えたのだ、と。スパルタの支配が転覆すると、同盟は、みずからを一つにまとめておく〝内的な絆〟をもはや手にしなかった。アテナイがスパルタと和平し、同盟は〝最大の広がり〟を手に入れたが、すぐに判明したのは、もはや自身が、その存続を保証するような積極的利害を何ら共有していない点であった。しかも財政的な逼迫から、アテナイの指導層が、盟友諸国に向けて往時の帝国主義的な〝力の政策〟の再開を迫られたとき、アテナイの海軍的覇権を一昔前に打ち倒した〝抵抗精神〟が改めて燃え上がった。とはいえ、前三七一年の和平以後のギリシア政治で、わけても重要で新たな積極要因といえば、エパミノンダスの指揮下にテバイが予想もしない興隆をみせた点ではないだろうか。これによって生じたのは、完全に新たな〝力の組み分け〟といってよい。アテナイは最初、テバイの側に立ってスパルタに刃を向けたが、前三七一年の和平でテバイとも袂を分った。戦争の利得を手にしたかったからである。けれどもアテナイが、単独の和平を手にしてスパルタに示したこの譲歩で、海軍同盟へのスパルタの承認を確かなものにした矢先、レウクトラの地であろうことかスパルタ陸軍が、エパミノンダスに率いられたテバイ軍に完膚なきまでに打ち負かされた。テバイは、この勝利によって前代未聞の新たな高みに昇りつめ、スパルタは他方、ギリシアでの〝次席〟に甘んじるほかはなかった。この大事に直面して、アテナイを主導する政治家のカリストラトスは、すばやく国家政策を転換し、公然とスパルタと同盟した。かつての盟友であったテバイという〝新勢力〟に釣り合わせるためである。ここに顔を覗かせているのは〝力の均衡を保つ〟という新たな発想で、これは、以後の十年に及んでアテナイの政治を支配し、ギリシア国家相互の新しい関係図式をも確立した。そうした発想の産みの親はカリストラトスで、この政治家は、和平交渉の間もテバイとの断絶を提唱し――アテナイに根強い親テバイの国民感情にもかかわらず――これを一貫して強要した。対して、かつてテバイが生み出した唯一の大政治家といってよいエパミノンダスは、スパルタを打ち破ってのちも、ペロポネソス同盟を解体させる攻撃の手を緩めなかった。かれは、スパルタの圧政からメッセニアとアルカディアの住民を解き放ち、かれらのために、各々の中央政府を具えた独立国家まで樹ち立てた。かれらは今や、他の小国と同じくテバイの配下となり、スパルタの覇権は、ご当地のペロポネソス半島でも崩れ去った。そうしたスパルタが完全な崩壊を免れたのは、ひとえに、

アテナイの軍事援助のお蔭というほかはない。アテナイが方向を転じてテバイに敵対した今、もしもマンティネイアの会戦――テバイがスパルタに最終的に勝利した――のさ中にエパミノンダスが討ち死にしなかったら、また、強力なライバルであったカリストラトスが時を置かずに失脚しなかったら、ギリシア政治の〝行く手〟はどうなっていたか――これを告げるのは難しい。その後の両国（アテナイとテバイ）を導いたのは、能力の点で遥かに劣った面々で、ゆえに国力も急速に衰え、互いの争いもおのずと収まった。テバイにしてもアテナイにしても、盟友諸国への覇権を維持するべく、ともに、別の戦いを――テバイは中央ギリシアとテッサリアで、アテナイは海において――繰り広げないわけにはいかなかったからである。それでも互いに向けた敵意は、デモステネスの時代にも消えずに燃えたぎり、あらゆる些細な小問題にしっかりと顔を覗かせた。アテナイではしかし、内政上の難問――海軍同盟が崩れ出して八方ふさがりの数年間にあえて直面を迫られた――に翻弄されて、この敵意もおのずと薄められた。ここにいう〝難問〟こそ、デモステネスとその世代が前三五五年に相続した遺産にほかならない。

海軍同盟の解体によって、アテナイの政治的将来への問いが――これを最後として――再び前面に押し出された。この問いに答える唯一の道は、イソクラテスの口からすでに発されていたように思われる。戦争下の暗澹たる時期の一つに、かれは、『和平について』で大胆にこう提案していたからである。アテナイに何よりも必要なのは、ほかでもない、あまねく帝国主義的政策を、かつてのアッティカ帝国の甦りを画策したあまねく企てを、第二次海軍同盟の新たな導入を避けがたくさせたあまねく武力外交を、すべからく捨て去ることなのだ、と。この提案を擁護するべく、かれは、高度に功利的な〝政治道徳〟に訴えた。こう囁いたのである。あまねく帝国主義的政策が内に蔵した〝プレオネクシア（いっそう多くを求める貪り）〟で世界全体の憎しみを買い、いずこでも蔑まれがちな政治扇動家や軍事策謀家の面々に導かれて〝国家〟を途方もない危険に晒すよりは、平和の裡に称賛を博す方がいっそう好都合なのだ、と。これと時期を同じくして経済の分野でも、同じような政策転換が『歳入論』をまとめた有能な経済家（＝イソクラテス）によって推奨されていた。アテナイがこの新政策を採択したのは、果たして、拠って立つ原理・原則を抜本的に転換したからなのか、それとも、単にそうせざるを得なかったからなのか――この点はともかく、アテナイは、改革を始めるにあたり、広く世界も認めるような財政的安定と〝信頼の回復（言葉の全き意味での）〟にその的を絞らないわけにはいかなかった。有産階級の間では、過激に走りがちな大衆の手に過去十年にわたって握られてきた国家の体制を、改めて築き直すに足る包括的な計画案すら論議されていたはずで、でなければイソクラテスにせよ、あえて公然と――小作品の『アレオパギティコス』でしたように――もっと権威ある政府が設けられなくてはならない、などと提唱しなかったにちがいない。アテナイは、そのような一歩を踏み出すには程遠い状態にあったが、それでも、こうした提案は為されたわけで、この事実から浮かび上がってくるのは、ほかでもない、国家を救えるのは上流階級を措いてないといった絶望的な時期に、当の階級がどれほどの力と闘志に溢れていたか、であるだろう。そうした階級は今や、大いなる威信を具えた野党的指導者を創り出した。エウビュロスがそうで、この人物の基本的関心は経済分野での財政改革にあった。かれの許に集ったのは、若い世代の輝ける秀才たちで、その中にはデモステネスも含まれていた。デモステネスは、アテナイの裕福な一門に属したから、素性も、教育も、見解も共にするこれらの面々に与したのは、まことに当然と考えられてよい。アテナイの力の再生も頂点を迎えたとき、これらの若者たちが最初に向かったのは〝政治〟であっ

た。ひたすら国家のために自身の力のすべてを存分に揮うこと――当人たちの願いはこれを措いてない。かれらは今や、アテナイがその歴史的経歴のどん底に喘いでいたこの時期に、あれほども熱烈に希求していた自身の経歴をあえてスタートさせざるを得なかった。この上なく気高い〝理想〟に後押しされて、かれらは、この上なく陰鬱な〝現実〟に押し入った。けれども、アテナイの将来を何とか形造ろうと努めるかれらの汗は、そもそもの始めから、理想と現実の〝葛藤〟がいかに法外かを確認し、それへの参戦を決意するだけで終わらざるを得ない、のを容赦なく運命づけられていた。

デモステネスは、その個人生活のゆえに、早くも若い頃から〝法律〟と関わらないではいられなかった。かれの父親は、かなりの額の金銭を残してくれたが、そのような金銭も、あこぎな後見人たちの手であらかた横領された。かれが並み居る陪審員たちの前に最初に登場したのは、自身の案件に関わる〝弁士〟としてであったが、そののちに選んだのは、法律顧問と演説代筆人（ロゴグラファー）の職であった。アテナイでは、政治と法廷の結び付きが公然と出来上がり、ゆえに、公的生活を始めるにあたって政治告発に手を染めるのは、この上なく〝まっとう〟であった。デモステネスの政治活動に向けた――われわれの手にする――最初の文献はだから、意気の上がらぬ失意の歳月における大きな裁判での演説なのである。そのような演説を口にしたのは当人でなく、かれは、他人のための代筆にひたすら甘んじた。『アンドロティオンを駁する』『ティモクラテスを駁する』『レプティネスを駁する』といった三演説に表明されているのは、すべからく同じ政策にほかならない。それらが目指していたのは、アテナイとその同盟国が演じた悲惨な戦争のさ中にアテナイを統治し、敗北した後も自身の権力の保持に汲々としていた政治党派の、わけても醜態を晒した面々への論駁だったからである。それと同時に、デモステネスは明らかに、野党陣営の突撃隊でも無上に頭の切れる、それゆえ無上に危険なメンバーの一人であった。論駁の容赦のなさは、ライバル同士の権力闘争がいかに熾烈を極めたか、を余すところなく物語っていた。ここでも目にされるのは、デモステネスの強さの秘訣が、どれほど次の事実に由来していたか、であるだろう。当時のかれは、他者に導かれつつ、もっぱら他者のためにせっせと汗を流したが、それでも初志を曲げず、あくまでも論理的・体系的に、さらには決然として自身の目標をひたすらに追求したからである。かれはしかし、時を置かずに、一人前の弁論家としてその頭角を現わした。かれの関心は、意義深いことに、そもそもの始めから〝外交〟に焦点づけられていた。これらの最初の言辞の中に将来の政治家の輝く〝行く末〟を読み取るのは、われわれの興奮を掻き立てて止まない。かれは、われわれも目にするように、アテナイの外交政策が抱える重要問題を、注目に値する力強さと確信に満ちて次々と取り上げたから、比較的その数も少ない初期の演説は、国際政治に占めるアテナイの位置を余すところなく浮かび上がらせるにちがいない。

テンポが遅くて骨の折れる〝内的な再構築〟に勤しむこのような期間を通して、アテナイには、生産的な外交政策を精力的に展開するなど望むべくもなかった。だからこそ、若いデモステネスが個々の政治問題を、これほども囚われのない心で活き活きと自発的に、文字通り〝ありのままに〟追求できたのは、いっそう注目に値する。敗北を喫して意気消沈したアテナイは、国際政治での完全な〝無活動〟を運命づけられ、ゆえに、デモステネスが介入できたのも好機が訪れた時のみであったが、時代はまことに慌ただしく、利害も頻繁にぶつかり合ったので、そのような好機はしばしば訪れた。もっとも、裂け目もおのずと口を開いて、その拡がりと深さを歳と共に増していった。文学ではイソクラテスに代表

され、政治では裕福な野党陣営の指導者エウビュロスに代表される思想集団が、確信をもってこう訴えた。アテナイは、弱体した状況下にあって、いずれにせよ外交になど関わってはならない、と。アテナイの将来は、慎重な経済政策と内政にひたすら的を絞ってこそ開かれるのだ、と信じて疑わなかったからである。デモステネスは、外交をめぐる最初の演説で、こうした孤立主義の姿勢に何がしかの共感を示した。ペルシアの侵略という――現実的あるいは想像的な――脅威に備えて〝防戦〟を呼び掛ける声はあまた耳にされ、かれは、この問題をめぐって戦争屋の面々を激しく攻撃したが、用いた言語の時宜を得た荒々しさと確たる筆致は、エウビュロスの陣営を大いに喜ばせた。人気の薄い見解をあえて口にするデモステネスの勇気は、改革派の人びとから共感的に注目されたにちがいない。かれらがモットーに掲げたのは、低俗な庶民感情と大衆型の決まり文句への反旗だったからである。デモステネスはしかし、政治的危険を判定する際には醒めた慎重さを貫いたが、心の底ではこう信じていた。アテナイは、目下の無気力から抜け出して積極果敢に国際政治に参加する道をしっかり歩まなくてはならない、と。それゆえアテナイが、惨めな孤立状態を乗り越えて、穏健かつ真っ当な――とはいえ用心を怠らない――外交姿勢を介して特権と権力を取り戻せるような〝好機〟はすべからく、もろ手を挙げて歓迎されたにちがいない。とはいえ、この目標に向けてどれだけ用心深く歩を進めようと、生じた好機を活かそうとすれば〝ある種の危険〟を冒さないわけにはいかなかった。その間も、完全な孤立主義を標榜する一派は、揺るぎない安定に向けてせっせと行動していた。デモステネスは、このように受動的な期間中も、知的にはひたすら能動的であった。というのも、リングに上がって試合の主導権を握るチャンスを待ち望んでいる熱烈な観客さながら、政治を舞台とした格闘家たちの戦いにその目を注いでいたからである。

かれの次の発展段階に位置するのは、大きくは外交政策とも関わる法廷演説の『アリストクラテスを駁する』を別にすれば、『メガロポリス市民のために』と『ロードス人の解放のために』の大演説にちがいない。アテナイとペルシア帝国の関係はどうあるべきか、をめぐる当人の見解は、すでに最初の公的演説で解説されていたが、今や、これらの両演説で攻撃の的となっているのは、アテナイの外交政策上の三つの主要問題、すなわち、ペロポネソス半島のそれ、海軍同盟におけるアテナイと脱退仲間たちの関係というそれ、北方ギリシアのそれにほかならない。かれの心に思い浮かんだアテナイの将来の外交政策は、これを介して、はじめて大胆に描き終えられた。当人の企ての目指すところは、どこまでも変わらず、デモステネスの眼は、絶えず〝ここ〟に定められて揺るがない。すなわち、不具化された孤立状態からアテナイを解き放って同盟にまで持っていく実際的政策の基礎を敷いて、チャンスが訪れたらそれに飛びつくこと、そのためにも、外交に関わるアテナイの政治家たちに、〝力の均衡を図る〟といった固有な発想でカリストラトスがその輪郭を描いた〝前向きのプラン〟をしっかりと選び取らせること、である。テバイが驚異的にのし上がって、スパルタとアテナイに並ぶ位置を占めて以来、この発想は、アッティカの政策がペリクレス以後にわけても成功を収めた時期からの〝古典的遺産〟とみなされないではいられなかった。ギリシアの国際政治を彩る諸要因は、十五年前に〝力の均衡〟という格率がその形を整えた頃とほぼ同じ状態に留まって、売出し中の政治家なら、この格率にみずからを合わせてその展開を図るだけでよく、あえて〝叛旗を翻す〟など論外であった。『メガロポリス市民のために』と題されたデモステネスの演説は、当人の心がいかに柔軟であったか、を存分に裏書きしているにちがいない。かれも、その他のあまねく政治家と同じく、カリストラトスの原則を採択し、時代の移り変わりに合わせて

――そもそもの原則を定めた政治家の精神を失うことなく――新たに解釈し直そうと持てる力のすべてを投入した。スパルタとテバイは、さまざまな規模で相互に釣り合わなくてはならず、アテナイは、双方の間の〝バランスの舌〟として機能すべきである、という発想は、以前にも、歴史の舞台にその顔を覗かせていた。テバイとその同盟諸国の優勢に促されて、アテナイは、しぶしぶながらも旧敵のスパルタと合意に至ったからである。とはいえテバイはまもなく、それ相当の処に落ち着いて、次いで、中央ギリシアのポキア人と矛を交え、惨めにも弱体化した。おかげでアテナイは、メッセニアとアルカディアという新国家――スパルタに対抗するべくテバイの手でペロポネソス半島に樹ち立てられた――が、力を更新したスパルタの手で再び打ち壊されないように、わけても意を尽くさなくてはならなくなった。さもなければアテナイは、おそらくはスパルタの配下となり、テバイも、取り返しのつかない程に弱体化したにちがいない。新しい両国も〝防衛力〟に欠け、アテナイに援助を仰がないでは済まず、ゆえにデモステネスはこう信じた。これこそ、しばらくは保たれていたバランスを移して、ほかでもないアテナイが、アルカディアやメッセニアと新たな同盟を結んで、レウクトラ以来の盟友であるスパルタと〝力〟を釣り合わせる格好の時期なのだ、と。

高い独立心に溢れたこの発想に続いて、『ロードス人の解放のために』という演説には、同様に興味のある〝別の発想〟も紹介されている。カリアの王の手で無慈悲にいじくり回されたロードスの人びとは、アテナイの海軍同盟から脱退した最初の国家群の一つに属したが、かれらには、民主国家を実際に助けてその独立を守ってくれる国などアテナイ以外にありえない、という事実が十分に考慮できなかった。民主派の政治家連中は、カリアの王の手でロードスから追い払われ、自責の念に駆られつつもアテナイに身を寄せて、新たな同盟に名を連ねるのを切に願ったが、アテナイ人は、民衆がおのずと抱くロードス人への怨恨感情を利用して、冷たくこう言い放った。ロードスの人びとは、アテナイを裏切ったから、このような帰結も甘受しないわけにはいかなかったのだ、と。しかるにアルカディアの人びとには、アテナイの孤立主義者の面々も、国際的な耳を具えていたのでこう弁解した。残念ながら〝援助の手〟は差し伸べられなかったが、それも、スパルタと同盟関係にあったからなのだ、と。デモステネスはしかし、このような底の浅い感情論を容赦なく攻撃し、そんなものは、支配の分野での消極性と優柔不断を覆い隠す〝口実〟以外の何ものでもない、と訴えた。かれは、双方（アルカディアとロードス）への対処の仕方を完全に切り離し、そうした言論のせいで、高まりつつあった評判も危うくした。かれは、いずれのケースでも敗北し、嘆き悲しむ両国の嘆願の群れは、アテナイから拒まれて〝敵側〟に合流した。アルカディアとメッセニアの人びとも、のちにはマケドニアのピリポスに加わって、アテナイは、ロードスの人びとのみならず、その他の小国も失ってしまった。これらの国々は、ロードスとの同盟が満期を迎えたら――かつてロードスが、アテナイとその同盟国の争いの最中に、後者をけしかけて易々と同盟から離脱させたように――やはり易々と、ただちにアテナイと〝依りを戻した〟であろうに・・・

デモステネスは『アリストクラテスを駁する』という演説で方向を転じ、はじめて北方ギリシアの政治を論じたが、そこで問われていたのは、ダーダネルスの人びとの安全であった。海におけるアテナイの最後の砦は、ヘレスポントス海峡の〝制海権〟といってよい。アテナイの穀物の供給も、北方ギリシアの鉱泉群の支配もこれに依拠したからである。デモステネスには、三段櫂船の司令官として沿海を就航した個人的体験から、この地域の重要性は十二分に理解されていた。近隣のトラキア人は、多年にわたってダーダネルスの人びとを脅かし、時として実際に襲撃も

した。しかるに今や、数人の兄弟がいがみ合って王権を分割する羽目となり、デモステネスは、かつての危機を再発させないためにも、トラキア人の一時的な不和をしっかりと利用し、戦略の上で重要極まりない海峡に居住するこの〝危険な隣人〟の力をなるだけ削ぐに越したことはない、と声を大にして訴えた。そうこうする間に、これとは別の〝要因〟が北方ギリシアの政治に登場した。ほかでもない、ピリポスという名の輝けるマケドニアの新王である。即位して瞬く内に、かれは――かつては切り刻まれ、ある時はこの国に、またある時は別の国にプライドもなくすがり付いていた――自国を、首尾よく、領域の全体にまたがる支配権力にまでまとめ上げた。デモステネスは、これに先立っても『ロードス人の解放のために』という演説で、アテナイを脅かすこの方面からの危機に言い及んでいた。ピリポスは、長く論争の中にあった〝アンピポリス〟というマケドニアの港をかなり強引に合併し、以来、アテナイとは交戦中で、アテナイも、旧来からの交易と艦隊の中心基地として、この地の所有権を主張して譲らなかった。かれは、自国を統一したのち、隣国のテッサリアも手中に収めた。テッサリアは、ずっと前から政治的騒乱で千々に分裂し、異国人による沈静化をひたすら待ち望んでいたからである。次いでかれは、テバイとポキス間の戦争に介入し、ポキスの人びとを打ち負かして、ティルモピュライをへて中央ギリシアに侵攻しようとした。この地で未解決のあまたの紛争を仲裁しようと考えたのである。アテナイ人は、その侵攻を妨げるべく急拵えで、守備の容易なこの峠（ティルモピュライ）に軍団を投入した。ピリポスはしかし、無理やりにここを押し通らず、方向を転じて、実際的な抵抗もなくトラキアの地を横切り、突然にダーダネルスに出現――誰一人として予想もしなかった――してアテナイを脅かした。トラキア人の手からこの海峡を守ろうと画策したデモステネスの計画は、唐突に、すべからく瓦解した。

絵の全体が〝様変わり〟したのである。マケドニアの危険は途方もなく大きなものだ――この点は、たちどころに自覚された。

このニュースでアテナイは、甚だしいパニックに陥ったが、まもなく、当のピリポスが病に倒れて遠征を取り止めたという報告を耳にして、パニック自体は軽率にも〝お祭り騒ぎ〟に転じた。それはデモステネスが、時の政府の手で押し進められていた消極的な孤立主義政策をきっぱり打ち捨てようと最終的に決意した瞬間で、訪れた好機は逃さずに掴み取ってアテナイの地位を少しでも高めようと腐心するかれの骨折りは、すべからく妨げられた。今や事態は〝介入〟を採るか、それとも〝孤立〟を選ぶかの原理上の問題ではなく、国はまさに危機の只中にあった。手を拱いて無為に時を過ごすのは、「何はともあれアテナイを救う」ものとは断じて解釈されないだろう。無為に留まるのは、国家の最重要の権益をあたら捨て去るに等しかった。ピリポスに向けた封鎖戦争――本気で取り組んだ者など誰もいなかった――でアテナイは、突然に守勢を余儀なくされ、国の全体戦略も大きな転換を迫られた。

ピリポスの急激な進軍は、デモステネスのエネルギーをすべからく呼び覚ました。ついにかれは、危険極まる攻撃者を得て、アテナイも、この瞬間に大胆な外交を展開して何処からも文句は出なくなった。もしも恵まれた環境下で育っていたら、デモステネスも、新興国に生まれてその築き上げと強大化にせっせと手を貸す政治家の一員になどならなかったのでは・・・という問いには、こう答えるほかはない。なるほど、前四世紀のアテナイに生きていたら、かれも、ピリポスのような相手を欠いて、みずからの決意、先見の明、勇猛極まる本質把握等々をすべからく発揮するまでもなかったかもしれない、と。それはともかく、わけても道徳的なあの時代に、〝良心〟という哲学問題に深い関心を寄せた人びとの間で積極的な外交政策への踏み切りを長きにわたって遮ってきた

〝道徳的な躊躇い〟は、今やきっぱりと払拭され、デモステネスは、いっそう心置きなく、融和策を主導する面々を置き去りにし、最初期の演説ではかなり距離を置いていた〝民衆〟に直かに訴えかけることも可能となった。民衆の〝得心〟に的を絞った政治論なら、民衆の〝興奮〟を冷まそうと意図した最初の演説の気高く、教訓的で、アイロニカルな調子とは異なったものの、ロードスの民主派の側に立った演説でもすでに展開されていた。『アリストクラテスを駁する』では、権力を握る政治家たちが容赦なく攻撃され、こう罵られてもいた。かれらは、みずからの金儲けに精を出し見事な邸宅でのうのうと暮らしながら、国を盛り立てる上では、こちらで城壁の漆喰を塗り、あちらで道路を修理する程度の汗しか流さないのだ、と。『軍備について』では、新旧のアテナイ人が比較され、前者は、あたかも独立収入を手にしているかのように大きな顔をして国家に寄生する連中と酷評され、後者は、あまたの戦傷を身体に刻んで帝国の創設に勤しんだ面々と称えられて、つまるところ、こう結ばれていた。政治家たちにそれを訴えても無益な上は、「世の人びとを〝新たな心性〟に向けて教化するに如くはない」。政治家たちが口にするのは――中身が何であれ――つねに民衆が耳にしたがっていることを措いてないのだから、と。

この一文には〝大いなる綱領〟も含まれていたのに、これまで、本気で取り上げられることはなかった。当の演説が、最近まで〝偽作〟とみなされてきたからである。十九世紀の学者たちは、しばしば、みずからの懐疑傾向を押し進めて、ここでのように〝あり得ること〟の領域を極端に狭めることも辞さなかった。もっとも、この演説が〝真作〟と証明されなくても、デモステネスの次の演説群が、質を同じくして精神的に一つのまとまりを為す点に差し障りはなかった。これらの演説群は、古代の人びとによって〝独自のグループ〟とみなされ、「ピリピクス（ピリポス関係の演説）」と名付けられた。それらが、先立つデモステネスの演説から区分されたのは、すべからく〝ピリポスを論駁した演説〟であったのに加えて、先に引用した一文にも簡単かつ印象的にまとめられていた「アテナイの人びとを教化するという大いなる理想」を共にしていたからにほかならない。あの一文には〝デモステネスの変化〟が申し分のない分かり易さで注釈されていたが、それは――実際には〝偉大な民衆指導家〟への変容であったのに――誤って「民主派」への転身という風にこれまで記述されてきた。そうした変化の実際を目にしたければ、ピリピクスをひも解くに如くはない。これらの演説には、なるほど、生じるであろう民衆の反応を前もって診断して統御する、アテナイの弁論家たちの〝意識的工夫〟がどっさりと満載されていた。かれらの手元には、則るべき〝一世紀間の経験〟以上のものが蓄積されていた。かれらの大半は〝並みの庶民〟でなく、大衆の本能に訴えかける〝特別な言語〟をせっせと創出できたからである。だが、いくら折に触れてそれらの言語を用いたにせよ、並みの扇動家の口調とデモステネスの才覚ではあまりに差がありすぎて、知的な眼識を具えた人間なら、とうてい双方を混同できないにちがいない。かれを導いて世の民衆に直かに訴えかけさせた〝燃える情念〟は、扇動家のそれと抜本的に異なっていた。そのような情念は、当人の厳密な政治知識の〝所産〟にほかならず、こうした知識に助けられて、かれは、自身の若さや穏健な性格がおのずと課した〝あまたの制約〟にも打ち勝って、まっとうな批評家として世に歩み出た。これと同じく、デモステネスのすぐれた人柄がアテナイの政治に及ぼした〝影響〟も、声高に叫びまくる扇動家のそれや、エウビュロスのようにごく並みの、勤勉で、記録に通じた、尊敬すべきベテラン政治家のそれとも次元を異にしていた。精神的に円熟の域にある政治家――外交をめぐる最初の演説は、デモステネスが、そうした人物であるのを明示してい

た――が突然にその本性を豹変し、単なる〝熱弁の士〟に転じるなど、いくら真面目な学者連中が〝無謀に〟示唆したにせよ、およそ考えられないのは言うまでもない。このような〝間違い〟の大罪をあえて犯せるのは、ピリピクスで用いられる〝言語〟がいかに斬新で壮大か、を正しく理解できない二流の徒輩を措いてない。

これらの演説に紹介された政治家たるに相応しい〝資質〟を存分に理解したいなら、そこに提案された〝実践的基準〟を研究するだけで十分とはいえない。そのような演説からも明らかなように、デモステネスには、アテナイと自身の運命を見て取る深い歴史感覚と、その運命に向き合って腰を引かない深い決意がしっかりと具わって、これは、単なる〝政治〟のレベルを超えていた。あるいはこう言うべきかもしれない。それはむしろ、〝政治〟という言葉でソロンやペリクレスが理解したような内実の政治であった、と。かれは、あまたの民衆と直接に向き合って、嘗められている目下の不幸――途方もなく大きな――をせっせと慰めたが、民衆はしかし、あたら手を拱いて〝より善い何か〟を期待させる事柄に手を染めなかった。そうした事柄こそ、あまねく惨めさの只中で実際に明るい唯一の局面というのに・・・。かつてソロンが立ち上がってアテナイの面々に警告したように、今やデモステネスもこう忠告する、「われわれの申し立てが聞き届けられなかったからといって、神々を咎めてはならない。もしもわれわれがピリポスの圧力下で一歩一歩と後退を強いられ、今やかれは、われわれの大半が〝とうてい対抗できそうもない〟と考えるような途方もない権力を手にしているにせよ、その咎は、ほかでもないわれわれ自身にある」と。ソロンは、国家の不幸に対して神々はどのような役割をお演じになるのか、を論じた際に〝テュケー（運）〟の概念を採用したが、その同じ発想が、ピリポスを相手としたデモステネスの警告演説でも、姿を変えて復活していた。それは当人が、

アテナイの運命と将来を深々と分析して得た基本テーマの一つであった。時はまさに、個人主義が異様に膨れ上がった時代を迎え、世の人びとはやみくもに自由を追い求めて、かえって益々、実際には誰もが出来事の世界の〝外なる流れ〟にいかに依拠しているか、をヒシヒシと実感した。エウリピデスの悲劇作品と共に開始された世紀には、いかなる時代にも勝って〝テュケーの発想〟が満ちに満ち、この時代の面々は、運命を甘受する傾向をいや増しに強めていった。そうした中でデモステネスは、古くて厳しいソロンの戦いを大胆に踏襲し、決意に基づいた行為を蝕む最大の敵ともいうべき〝運命論〟に果敢に挑み掛かった。かれは、アテナイの運命に対する歴史的責任を――それこそ真正面から――みずからの世代の両肩に負わせた。そしてこう宣言する、かれらの果たすべき課題は、ペロポネソス戦争に敗れて以後の〝暗黒時代〟に生き、全ギリシアの抵抗にも挫けないでアテナイを今一度、大いなる権力と特権の座にまで運び上げた〝世代のそれ〟といささかも異ならない、と。それを実現するべくあの世代が用いたのは、あくまでも一つ、民衆のあまねく強さを油断なく精力的にサポートすることを措いてない。しかるに今日――とかれは容赦なく付け加える――アテナイは、拳闘試合に臨んだ〝蛮人〟に等しく、相手から最後に殴られた部位に庇いの手をあてがうのみで、効果的なパンチを食らわせる箇所を積極的に探そうともしない。

これらは、まことに単刀直入な発想であったが、デモステネスは、これを用いつつ『最初のピリピクス（ピリポス弾劾第一演説）』で、アテナイの人びとを教化するという自身の仕事に着手した。この作品の日付は、普通一般に〝あまりに遅く〟設定されているが、どうやらデモステネスが――ピリポスがダーダネルスに加えた予期せざる脅しによって――はじめて〝危機〟に蒙を啓いた時期、と考えないわけにはいかない。か

れは、アテナイに向けたピリポスの新たな攻撃に先立って〝新たな戦略〟を構想し、それに向けた〝予備的な提案〟も怠らなかったが、それらに目を向けると、おのずとこうなるからである。アテナイに提案された軍事的・財政的な方策は、次の攻撃に備えてしっかりと採択されるべきであったのに、アテナイの人びとは、まるで受け容れなかった。かれは、ピリポスが病いから回復し、北部ギリシアの有力な経済国のオリュントスを攻撃して、ついにアテナイがオリュントスの人びとと手を携えてマケドニア人のいや増す圧力に抗する〝最終の機会〟が訪れるや、そのような提案を改めて繰り返した。かれは、熱意を倍加させつつ再度こう問いかけた。アテナイは、みずからの宿命を雄々しく引き受けることになるのか、それとも、運命に女々しく白旗を掲げることになるのか、と。かれが腐心したのは、自立的行為に必要な〝勇気〟をアテナイに呼び覚ますことにほかならない。だから、まやかしの教師連中を容赦なく攻撃した。かれらは、しきりと警報を発し悲嘆を掻き立てて――遅まきながら――民衆にこう思い込ませようと画策していたからである。行動に移るべき時が訪れているのだ、と。デモステネスは、敵の力を冷静に分析したが、その分析たるや、並みの「実際政治家」の手になる程度を超え出ていた。そこでは、敵の力の拠って立つ〝道徳規準〟が批判的に論じられていたからである。これらの演説には、閣議に向けた政治家の熟慮を凝らした〝報告〟のイメージを差し控えなくてはならない。それらは、知的ではあるが躊躇いがちで利己的な、世の民衆を導く〝汗の結晶〟であったからである。そこで意図されていたのは、政治家のお眼鏡に適うように彫琢される〝素材〟さながら、大衆を陶冶することを措いてない。この時期にまとめられた演説では、それゆえ、倫理的要素がわけても重視されている。ざっとギリシア文学を見渡しても、このようなものは、外交をめぐるその他の演説にまるで見当たらない。デモステネス自身は、ピリポスがいかに傑物で、いかに魔術的・魔人的な――純然たる道徳基準ではとうてい測りえない――人格の持ち主であるか、を骨の髄まで知悉していたが、やはりソロンの弟子として、そのような基盤の上に築かれた〝力〟が長く続くとは信じなかった。かれは、ピリポスの神秘的な運勢（テュケー）を文句なく褒め称えるが、それでも、アテナイの運勢を固く信じて譲らない。後者の軽やかな翼は、アテナイが担う輝かしい歴史的使命から発する〝栄光〟にしっかり触れていたからである。

デモステネスは、アテナイの人びとに自身の運命を理解してもらおうと、せっせと骨折りの汗を流したが、われわれも、この戦いに従軍するとして、もし仮に〝あるべき政治家〟という理想がいかに展開されていったかを、さまざまに変転するギリシア精神の諸相を通して存分に跡付けた経験があったなら、どうしても、責任に溢れた政治指導者の――アッティカ悲劇に登場する――最初の偉大な〝典型たち〟を思い浮かべないわけにはいかない。これらの典型たちも、やはりソロンの精神を呼吸しながら、その一方で、意思決定の悲劇的ディレンマに囚われていた。そのような悲劇的ディレンマは、デモステネスの演説中で現実のものと化し、これの深い自覚――単なる主観的な興奮でない――こそ、次代の人びとがデモステネスに感じ取った「パトス（抗いがたい情念）」の滾々と湧き出る〝泉〟にほかならない。もっとも次代の人びとの関心は、もっぱら美学に絞られ、かれらを駆り立てたのは、もっぱらスタイルを真似たいという想いであったけれども・・・。ちなみにかれらは、弁論史における新時代の基盤は〝スタイル〟にあると実感したが、これは、しっかりと正鵠を射ていた。デモステネスの時代の悲劇を特徴づけるのもスタイルで、心を深く揺さぶるスタイルの影法師たちは、スコパス――当時の彫刻界の第一人者――の刻んだ〝面相〟に再びその顔を覗かせ、加えて、新感覚の生き方を代表する二人の偉大な先駆者（デモステネスとス

コパス）から壮大なペルガモンの祭壇まで、一本の線が直接に辿られるにちがいない。ペルガモンの祭壇は、豊かで力強い情感の洪水にほかならず、そこには、新しいスタイルがこの上ない気高さでその顔を覗かせていたからである。デモステネスは、いかにしてヘレニズム時代における最大級の古典作家になり得たのだろうか。この時代は、自身が実感していた固有の情感をすべからく――それも完全かつ十分に――デモクリトスが口にしていたからこそ、その政治理想にも共感を示したが、情感と、それを表明すべきスタイルの双方は、かれにとって、みずからの政治理想を実現しようと繰り広げる悪戦苦闘から切り離しえない。弁論家と政治家は、デモステネスでは〝一体〟なのである。かれの雄弁も、単にそれのみで、それを用いて自己表現に勉める〝政治思想〟の力と重みを欠いたなら、それこそ〝無〟に等しかったにちがいない。雄弁と政治思想の双方は、かれの心が情熱に駆られて生み出した所産の数々に、確かさ・深み・堅固さを与えてくれた。これらの確かさ・深み・堅固さは、かれを模倣する無数の人びとには張り合いがたく、かれの所産を、時と処と歴史的危機――時と処の中で不滅化される――にしっかりと固定した。

わたしが意図しているのは、デモステネスの政策そのものを漏れなく解説することではない。かれの演説から得られる資料は、実際の出来事を復元する上で――むしろそれ以上に、政治家に向けた当人の発展を復元する上で――まことに途切れ途切れというほかはないが、それでも、ほとんどの時代に向けた現在の歴的証拠と比べるなら、途方もなく〝豊か〟といってよい。ともあれここで為されるべきは、いかにして当人が、祖国の導き手としての〝輝かしい偉業〟にまで上り詰めたかをしっかりと辿って、アテナイ国家の独立的生存を賭けた〝最後の戦い〟にまで至ることなのである。

オリュントスが陥落し、オリュントス同盟に属したカルキディア半島の有力都市群も破壊されて、ついにアテナイは、マケドニアのピリポスとの和平を拒めなくなった。和平条約は前三四六年に結ばれ、デモステネスですら、このような和平の願いを心の底から支持したが、ピリポスの提示した条件には首を縦に振らなかった。それによると、中央ギリシアは敵の手に引き渡されて無防備となり、アテナイを取り囲む輪はさらにきつくなったからである。かれはしかし、そうした条件への署名を拒んで和平の邪魔はできず、『和平について』で、わけても強くアテナイの人びとにこう助言しないではいられなかった。中央ギリシアを支配する上で〝不可欠の基地〟ともいうべきポキスもテルモピュライも共にピリポスの手に落ちた以上は、武力に訴えた抵抗などもっての外である、と。この演説にも、最初期の演説群――ピリポスに向けた戦いがライフワークになる以前の――と同じく、デモステネスがいかに〝現実的な政治家〟であったかが、はっきりと示されていた。かれは、可能性の薄い事柄になど汗は流さず、政治が非合理な情念に左右される事態にあえて異も唱えたからである。みずからの敵を攻撃する際に、その敵の最も強い処に的を絞る者などいるはずもない。これらの高度に実践的な演説には、デモステネスの明白な価値判断に不可欠な〝観点〟がしっかりと紹介されていた。ここでもかれは――いつもと同じく――本質的に〝教師〟なのである。かれは、雄弁に訴えて大衆を圧倒し、その心を巧みに掴もうなどと単純に欲しないで、むしろその尻を叩いていっそう高次の地平に至らせ、一歩一歩と導き上げて、みずからの目で〝諸々の事実〟を判定させようとする。そのような好例は『メガロポリス市民のために』であろうか。そこで論じられていたのは、〝力の均衡を保つ〟という――目下の議論の事例に用いられるべき――政策だったからである。『シュンモリアについて』と『ロードス人の解放のために』は、騒々しい主戦

論的情念を押し鎮めて統御する能力が、かれの中で着実に高まりつつあるのを物語る古典的実例にちがいない。これらには、政治とは徹頭徹尾〝客観的技術〟なのだ、というデモステネスの政治観がこの上なく開示されていたからで、ピリポスとの戦いも当人の姿勢を何ら変えられなかった点は、前三四六年の好ましからざる和平以後の演説からも明白にちがいない。『ピリポス弾劾第一演説』とオリュントスをめぐる三つの演説（『和平について』『シュンモリアについて』『ロードス人の解放のために』）には賢明な助言が満ち溢れ、これらから裏書きされるのは、今や当人が見事な政治家となって、未来をはるかに見据えて計画を立て、しかも、ひとたび為された意思決定を速やかに実行する上で〝いつ〟がその時期であるかをよく弁え、テュケーの支配するこの世ではいかに多くが〝好機〟に依拠しているか、を断じて忘れない点にちがいない。かれは、いかに多くがチャンスに依拠しているかを知り抜いて、この点は、その行為からも常に覗き見られた。前三四六年の和平後の注目すべき沈黙も、これによって説明されるのである。そうした当人を冷たく批判する面々にも、その逆に、熱く情緒的に擁護する面々にも、この点は――今日でも――よく理解されていなかった。デモステネスが、徹底して論理的に推論した末に、みずからの態度を転換して〝状況〟に合わせないではいられなかった時、かれらは共に、当人の優柔不断と性格上の弱さが図らずも暴露された、と考えて憚らなかったからである。

けれどもデモステネスは『和平について』をまとめていた時ですら、みずからが何を欲しているかを存分に知悉して、その目を絶えず〝標的〟から逸らさなかった。かれには、和平が永遠に続くなどとうてい信じられなかった。当の和平は、アテナイを威圧する単なる〝手段〟にすぎなかったからである。だからかれは、そもそもの和平がピリポスに対して実質的には〝役に立たない〟のを正直に認めて、あるいはアイスキネスのように、みずからの抵抗の意思が崩れた以上はあえて事実に目を閉じる、はたまたイソクラテスのように、さらに歩を進めて、やむを得ないことを潔く敢行し、ピリポスを〝ギリシア全体の先導者〟だと宣布する心構えの整った、それぞれの政治家たちの手で国を守る道を選び取った。もしかするとマケドニアが支配するのでは・・・という怖れを相手の〝精神戦〟でイソクラテスの占めた固有の位置を理解したいなら、どのようにかれが、ギリシアの政治的統一を唱える主たる〝先触れ〟にまで徐々に変身したか、を思い出してみないわけにはいかない。このような統一を実現するべく、個々の独立ポリスを解体して単一の国民国家を築き上げるなど――ポリスの強弱に差があったにせよ――ギリシアには期待されるべくもなかった。ギリシアの統一はあくまでも〝外側〟から訪れた。ヘラスの地をまとめて一国家にするなど、おそらく、共通の敵への戦いぐらいなものであろうか。ところでイソクラテスは、なにゆえに〝敵〟をマケドニアでなくペルシアと考えたのだろうか。現在の差し迫った正銘の危険はマケドニアで、対してペルシアは、およそ百五十年ばかり前、その攻撃によってギリシア人に互いの〝いがみ合い〟を忘れさせたというのに・・・。唯一の理由とされてよいのは〝慣性の力〟にちがいない。イソクラテスは、溢れるばかりの独自の発想に恵まれず、多年に及んでペルシアへの〝聖戦〟を訴えて止まなかった。かれは、マケドニアの危険を回避するべく、アテナイの――ひいてはギリシア全体の――自由の敵ともいうべきピリポスを、ペルシアに対する民族戦争の〝旗手〟に運命づけようとしきりに画策したが、この発想は、許されざる政治的愚劣というほかはない。これによってギリシアは、互いに手を取り合って、みずからを敵の手に譲り渡したからである。この発想はピリポスを、この上もなく喜んで受け入れるはずの〝地位〟にまで持ち上げた。ギリシア人を支配しようと画策したかれの企てに、いくばくかのギ

リシア人は道徳的不平を覚えたが、そのような不平も、これを介して拭い去られるだろうからである。イソクラテスは、マケドニアの力の侵略を拒んで受け入れない連中のすべてに「この戦争屋め！」と叫んだが、それは、このような高所に立っていたからにほかならない。親マケドニア派の面々は、イソクラテスの掲げる汎ギリシア的なスローガンの許でなら、組織的な宣伝をくり広げるのも難しくあるまいと考えた。

ギリシア人に向けたピリポスの軍事攻撃の準備に〝政治闘争〟がいかに大きな役割を演じたか――この点は、つねに心に留めておかなくてはならない。ピリポスの政策はむろん、そのような準備に絶えず〝自衛〟の衣を纏わせた。現実の軍事的決定は、できるだけ唐突に下され、一挙にすべてを為し終えるのを旨とした。民主主義の国々は、戦争の備えもなく、強い軍備を即席に整える暇すらないのが通例で、それゆえ、しっかりと煽り立ててその力と士気を挫くという仕事が、長い時間をかけて十二分に工夫された。ギリシア人のような国民は〝征服される運命〟を避けがたい――ピリポスには、これを見抜くに十分な眼力が具わっていた。切実な問題の解決にあたって、ギリシア人の教養と自由は、意見の一致を絶えず妨げたからである。大衆はあまりにも近視眼で、先を見据えて正しい答えになど至れなかった。デモステネスは、あまねくギリシアの都市にみられた親マケドニア的な扇動をたっぷりと口にしている。このような組織的宣伝は、ピリポスが具える軍事的才覚の真に新しくて巧妙な点で、その成果は通常、反目し合う陣営の一方がピリポスに呼びかけて和平の労を取ってもらう、という形をとった。デモステネスが、演説の中で攻撃のポイントをいかに慎重に選んでいるかを目にしたなら、こう悟らなくてはならない。あまねく筋道を捻じ曲げてあまねく論点を曇らせるような仕方で、巧妙かつ精力的に相手陣営が押し進めたアテナイ内部でのこうした〝宣伝〟こそ、かれが〝主たる問題〟と考えたところのものにほかならない、と。デモステネスの仕事はだから、小さな内閣などより、無気力で心得違いの民衆を納得させることであった。盲目の――あるいはインチキの――指導者連中が画策したのは、次のような催眠型の信仰に訴えて民衆を麻痺させ無感覚に導くことだったからである。すなわち、みずからの自由と生命のために戦わねばならないか否かは、もっぱら、みずからの正直な〝平和愛〟に掛かっている、というような・・・

デモステネスは、みずからの運命内のこうした〝新たな戦い〟から引き下がるようなタイプではなかった。かれは今や、平和主義の権威者たちを大胆に攻撃し、往時の努力を再開して、何はともあれアテナイの孤立主義を叩き壊そうとした。ピリポスは、ギリシアを統一する指導者のふりをしていたが、デモステネスが提示したのは、このピリポスに〝対抗〟してギリシア人を一つにまとめ、みずからの国家的独立を守り抜くように勧告することであった。和平中にまとめられた各々の演説は、イソクラテスの汎ギリシア主義に対抗して自身の〝それ〟を掲げ、これ自体を〝現実の政治力〟にまで組織立てる上での、急を要した骨折りの数々といってよい。アテナイの魂のために戦ったのち、かれは、ヘラスの魂のためのそれを開始して、こう叫んだ。アテナイにとって〝囲い込み〟から抜け出る唯一の道は、ピリポスをギリシア側の盟友群から引き離し、アテナイが、あまねくギリシア国家の〝頭〟へと踏み出すことを措いてない、と。デモステネスの掲げる理想は、これ以上でも以下でもない。事実かれは『ピリポス弾劾第二演説』で、ペロポネソスの国家群をピリポスから切り離すべく自身がいかに汗を流したか、に言及してもいる。かれはしかし、最初は成功を収めなかった。これらの国々は、アテナイを訪れて同盟を求めた折なら、説得もされてアテナイ側に付いたかもしれないが、時は、ピリポスとの戦いがあんなにも凄まじくなる前であっ

た。だからデモステネスは、そうできる国々とはどことでも同盟を結ぶ〝政策〟を公然と擁護し、民衆に向けてこう助言した。ほとんど価値のないスパルタとの同盟に操を立てるあまり、その他のあまねくペロポネソスの国々を撥ねつけるのは得策といえない、と。これらの国々を撥ねつける唯一の理由は、スパルタとの同盟だったからである。しかるに今や、アテナイは、これらの国々をすべからくピリポスの〝友好的な腕〟に投げ入れてしまった。スパルタよりも遥かに重要な盟友であったはずのテバイですら、スパルタとアテナイが、宿敵のポキス人を擁護したことで、あろうことかピリポスに接近してしまった――その接近ぶりたるや、みずからの利害が要求する程度も越えていた――。デモステネスは、のちに自身でも口にしているように、常にこう考えていた。端的にテバイを嫌うあまりポキス人に肩入れするのは得策といえない、と。ポキス戦争を介して、今やピリポスは、中部ギリシアの政治に介入する機会を手に入れた。ポキス人は押し潰され、アテナイは、長きに亘ってテバイとの友好を回復できなかった。このような敵意で四分五裂したあまたのギリシア人を糾合して、ピリポスに向けた汎ギリシア戦線を築き上げるなど、それこそ〝シジポスの難業〟と思われたけれども、デモステネスは、数年の努力をへてこれに成功した。当人が、ギリシアの自由を支える〝旗手〟の座に登りつめたのも十分な驚きであったが、汎ギリシア的な理想が、弁論術の中で宣布されたのちも〝おとぎ話〟のように響き渡った点で、さらに一層そうなのである。これに成功したデモステネスは、他方では、外交をめぐる第一演説で「外交をめぐるあまねく決定の根底には、わたしの場合、アテナイの利害がどっしりと腰を下ろしている」という公理を定めたデモステネスでもあった。その時のかれは、頭脳明晰で意思堅固な帝国主義者カリストラトスの学校に籍を置く一介の政治家であったが、今や、『ピリポス弾劾第三演説』をまとめる頃には、押しも押されぬ汎ギリシア的な政治家になっていた。かれはこう考えた。かつての政策にみられた大いなる民族的伝統を心に留めつつ、ギリシア人を正しく導いてピリポスに抗する役割を引き継ぐのが、アテナイに課された仕事なのだ、と。かれは、この旗印のもとに大半のギリシア人を一つにまとめたが、これ自体は、古典期の歴史家たちの筆でも、最高級の政治的手腕が成し遂げた〝偉業〟という風に記されていた。

『ケルソネスの情勢について』と『ピリポス弾劾第三演説』といった、戦争開始の少し前にまとめられた大演説でデモステネスは、懐疑や絶望の諸勢力を相手に格闘し――前三四六年の和平以前にまとめられた『ピリポス弾劾第一演説』『同第二演説』でそうしたように――〝民衆指導者〟としての自身を改めてアッピールした。けれども今や、場面全体が大きく転換していた。かつてのかれは、自身のために戦う〝孤独な戦士〟であったが、今のかれは、ギリシア全体を風靡する運動の指導的支柱にほかならない。かつてのかれは、アテナイ人の喚起にせっせと努めたが、今のかれは、あまねくギリシア人に呼びかけて、その無気力を振り捨て生存のために戦うべし、と促すのである。ピリポスの力は途方もない速度で押し拡がるのに、ギリシア人は、まるで嵐か自然災害に対するように、ただ手を拱いて立ち尽くすのみ・・・。天災を前にすれば、世の人は――まったく処置なしと思い知って、迫りくる雹や霰が自宅よりは隣家を叩いてくれるのを願いながら――ひたすら受身的に見守るばかりだったからである。正銘の指導者に課されているのは、このように情けない〝受身の姿勢〟から民衆の意思を解き放って、性悪な助言者連中から当の民衆を救い出すことを措いてない。助言者連中の性悪さは、民衆を敵の手に売り渡すのを喜びとし、只々ピリポスの利害にのみ奉仕した点にあったからである。しかるに民衆は、かれらの声に喜んで耳を傾けた。何一つ要求されなかったからである。デモステネスは、ピリポスの

第五列（秘密部隊）がすでに主君に引き渡し終えた諸都市をしっかりと数え上げる。すなわちオリュントス、エレトリア、オレウス・・・。これらの都市は今やこう告白する、「もしも以前にこれを知っていたら、断じて陥落などしなかったろうに。今となっては、それも〝後の祭り〟というほかはない」と。船の救い出しは、船自体が無傷の間に為されなくてはならない。大波が船を圧倒すれば、いかなる努力も役に立たない。アテナイの人びとは、ともあれ自分から〝行動〟しなくてはならない。たとえ他の誰もが屈するにせよ、かれらは、自由を掲げて戦わなくてはならない。すなわち金銭・船・人員を提供し、そのような自己犠牲を介して、自身に加えて他のギリシア人の便宜も図らなくてはならない。大衆のケチな貪りと職業政治家連中の頽廃は、かつてペルシアの侵略軍も打ち砕いたギリシアの〝英雄精神〟にその席を譲らなくてはならないのである。

目下のアテナイ人は、偉大な祖先と同等の名で呼ばれるに値しない〝堕落した種族〟ではなかったのか――ずっと前にデモステネスは、こうした問いを提出したこともあったが、そこでの比較は、改めてこの問いを得心させるのではあるまいか。かれはしかし、もっぱら〝事実〟にのみ関心を抱く歴史家でも、はたまた民族学者でもなかった。ここでも当人は、いつもと変わらず――まことに自然かつ必然的に――果たすべき教育的義務を自覚した〝教師〟であって、それゆえ、ほとんどの兆候がそう告げていると思われたにも拘わらず、アテナイ人の性格が頽廃に傾いている、などと信じなかった。プラトンは、アテナイ国家に背を向けて、治癒不可能な病いで死に瀕した患者にするように、国家への〝門戸を閉ざし〟たけれども、このような姿勢の踏襲は、デモステネスにはとうてい耐えられなかった。とはいえ国家の振る舞いは、さもしくてケチ臭くなっていた。国家の精神は、本当のところ、ケチ臭くもあらねばならないのだろうか。いかにすれば国家は、いっそう見事な思考といっそう崇高な果敢にまで登り得たのだろうか。弁論家としてのイソクラテスは、現在と過去を比べて、たった一つの結論に至りついた。すなわち〝過去は永遠に死に絶えた〟という・・・。現役の政治家としてのデモステネスは、しかしながら、みずからの要塞の壁がただ一つでも健在で、なおも防御が可能であるかぎり、こうした見解に与することはできなかった。かれはひたすら、アテナイの初期の偉大さを〝拍車〟に用いて、同時代の面々から〝力の切片〟をすべからく寄せ集めようとした。かれはしかし、過去と現在を比べて、目下のアテナイ人には、偉大な祖先と競い合うのが〝望ましい〟などと単に結論づけなかった。かれらはむしろ、本気で真剣に競い合わなくては〝ならない〟――これが、かれの考えるところであった。とはいえ、今日と昨日を分かつ裂け目がどれほど広くて深かろうと、アテナイは、みずからの歴史（＝昨日）から逃げ去ろうとすれば、必然的に、みずからの自己（＝今日）を捨て去るほかはなかった。人びとの歴史が偉大であればあるだけ、その歴史は、いっそう確かに衰退を運命づけられ、負わされた責務を逃れられないのは――その達成が不可能にしても――いっそう悲劇的となる。デモステネスはむろん、意図的に自身を欺くことも、無責任にアテナイ人を導いて〝危険な冒険〟に駆り立てることもなかったが、それでも、こう自問せずにはいられない。わたしは、他のどの政治家にも勝って〝現在の切迫性〟を見抜いていたが、だからといって、わたし――ないし誰か――の手で「可能な事柄を選び出す技術」と呼ばれた〝政治〟が本当に実践されてよかったのか、と。かれは、今日の大半の歴史家がそう理解していたよりも、はるかに〝実際的な政治家〟であったが、その魂の中では、一方における実際政治家と、他方における正義や道徳的責務に深い関心を寄せた理想主義の政治家の間で、次のような根本問題をめぐって白熱した大論争がしっかり展開されていたにちがいない。すなわち、アテナイの生存全

体を危険に晒してまで、微力なアテナイに不可能事の遂行をあえて迫るのが、果たして〝正しかった〟のかどうか、という・・・。かれは、アテナイにまことに多くを求めたとき、心もとないこの〝期待〟を躍起になってロマンチックに弁解などしなかった。かれには、国家が――個人に劣らず――存亡の危機に際して、想像を絶した途方もない〝汗〟をふり絞ること、その程度はしかも、国家がみずからの危険をどれだけ深刻に自覚し、どれだけ真剣に生き残りたいと願うかに正確に比例すること、が十分に分かっていた。これは実に〝自然の神秘〟ともいうべく、どんなに賢い政治家の予知もとうてい及ばない。事が生じた後なら、誰もが気楽にこう口にできるだろう。このような問題も〝単純計算の一つ〟のごとく巧みに扱って、祖国への忠誠、その力の信頼、避けがたい運命の甘受からあえて成し遂げざるを得ない、というわけでもない〝賭け〟ならさっさと拒否して構わないのを過たずに見分けるのが、真の政治家というものだ・・・と。そのような危機の瞬間に、ポリスの理想である〝英雄精神〟を執拗かつ華麗に表明したのが、ほかでもないデモステネスであった。当人の胸像の顔の部分を眺めてみるがよい。まことに不安げで、瞑想がちな、心配のシワを深く刻んだその顔から容易に見抜けるのは、かれが、ディオメデスのような筋金入りの傑物にも、はたまた、アキレウスのような伝説的英雄にも生まれついていなかった点にちがいない。かれは、文句なしに〝時代の人〟であった。かれの戦いはなるほど、これによって、かえって高貴の度をさらに高めた。いっそう敏感な本性といっそう精妙な個性がますます要求されたからである。

デモステネスは、この〝挑戦〟を退けることができず、それが何を意味しているかをすべからく弁えた上で、あえてこれを受け容れた。アテナイ人は、危機をしっかりと理解した時にのみ、これと向き合うことができたが、他の人たちは、しばしば危機に突入しておきながら、まるでそのことを理解していなかった――かつてトキュディデスはこう口にしたが、デモステネスも、ここでの原理に則ってこう警告する。この戦争は、あのペロポネソス戦争と違って、アテナイは、アッティカの地に侵入する敵を大人しく受け容れて、城壁の背後からじっと見守っているわけにはいかないのだ、と。あれ以来、戦争のテクニックも大きく進歩して、アテナイは、もしも敵が国境を踏み越えるまで手を拱いていたら、きっと、それまでの努力を不意にしただろう――これこそ、デモステネスが「ただ手を拱いて単に見守っているのみ」を拒絶した主たる理由の一つであった。かれは、単にギリシア人のみならずペルシア人にも訴えかけた。マケドニア人は、ギリシアを征服してすぐ、ペルシア帝国の転覆にも直進したから、ペルシアが、ギリシアの運命に無関心でいるのは〝甚だしい盲目〟というほかはなく、それゆえデモステネスは、こう考えた。わたしの政治家としての推論は、もしもピリポスがギリシア人を叩き潰したら、どのような運命がペルシアを待ち構えているか、をペルシア大王に了解させるに足る説得性を具えているはずだ、と。もしもかれが〝自身で〟アジアを訪れていたら、なるほど事態はこう展開したかもしれないが、かれの派遣した使節に、ペルシアの〝怠惰な物臭〟の打ち壊しはいささか荷が重すぎた。

デモステネスが直面せざるを得なかった問題の今一つは、いわゆる〝社会問題〟であった。かれの生涯を通して、富める者と持たざる者の裂け目は、ますます拡大の度を増して、かれは、この上なく明瞭にこう理解した。このような乖離は、生き残りを賭けた戦争に大きな支障をきたすためにも許されてはならない、と。もしもそれが許されたら、この乖離は、社会の全階級を統合して為される〝諸努力〟を著しく減じるだろうからである。『ピリポス弾劾第四演説』は、実際に目にされたいくばくかの悪感情を中和させて、何らかの〝歩み寄り〟を少なくとも見つけ出し、

この裂け目に架橋する企てにほかならない。そうした企てには、両陣営が、それぞれに犠牲を払わないでは済まない。社会問題の解決は、迫りくる侵略者からわが身を守るのだ、という人びとの意思にいかに依拠しているか――これが、この企てに物語られているからである。デモステネスは、それを見事に成し遂げたが、そうした成功を物語るこの上ない証拠は、おそらく、それ以後の戦争であまねくアテナイ人にみられた〝自己犠牲の精神〟にちがいない。

戦いは、一つにまとめられたギリシア人に不利に運んだ。前三三八年のカイロネイアの会戦ののち、ギリシアのポリスの独立は脆くも壊れ去った。自由への最後の戦いに身を投じるべく、ポリス相互が同盟を結んだときですら、古い有力ポリスは、マケドニアの王が手にする組織的な軍事力に抗する術をもはや持たなかった。ポリスの歴史は、今や、マケドニア帝国の歴史に呑み込まれた。アレキサンダーは、ピリポスの突然で不自然な崩御ののちアジアの全域におよぶ凄まじい征服行を介して、ペルシアの支配の崩壊の上にこの帝国を樹ち立てたからである。新しくてまことに意外な〝未来〟が、ギリシアの入植、ギリシアの学問、ギリシアの通商にその門戸を開いて、これは、アレキサンダーがあまりに早い死を迎えて、その帝国が後継者たち（いわゆるディアドコイ）の巨大な君主国へと解体した時でも、閉じることはなかった。それでも古いギリシアは――政治的には――死滅していた。ペルシアという世襲敵国を相手とした民族戦争ですべてのギリシア人がマケドニアの指導下に一つにまとまる、といったイソクラテスの夢は、本当に実現した。そのかれは、自身の死によって、独立を喪失した民族が〝仮想の敵〟に勝利したからといって、実のところ、いささかも民族的士気は高まらなかった、という事実を噛みしめる〝悲惨〟は免れた。外部からの強制的合併は、政治的な不統一を解消しないのである。アレキサンダーの遠征中、正銘のギリシア人なら誰もが、卓抜きわまりない指揮のゆえに、あたかも神のようにこの人物に祈りを奉げるよりは、新たなこのアキレウスが〝死んだ〟という朗報を何よりも耳にしたかったにちがいない。あまねくギリシアの愛国者たちがこぞって、この朗報をいかに熱心に待ち望んでいたか、そのかれらが、いかに繰り返して失望を味わったか、そして、誤った情報に踊らされていかに早まった反乱に駆り立てられたか――これらの記事を目にするのは〝悲劇的〟でもある。マケドニアの軍隊は、かれらの反乱を潰して血の海にし、デモステネスは、期待を抱いてよいものは何一つ、自分にも同胞のギリシア人にも残されていないと信じて、ついには〝死〟の中に自由を見い出した。

とはいえ、アレキサンダーの死後、もしもギリシア人がマケドニアの足枷を本当に振り捨てられたにしても、何が起こったであろうか。たとえ勝ちを収めたにせよ、かれらには――異国に統治されてもされなくても――政治的未来はまるでなかった。ポリスの歴史的生命は終焉を迎え、これに取って代わる〝新しい人為的体制〟は目にされなかった。ポリスの展開を判定するのに、今日の国民国家の基準を当てはめるのは〝大きな誤り〟で、本当のところは、政治的な意味での〝国民感情〟をギリシア人は啓発できなかった、のである。この感情に訴えてこそ、国民国家も樹ち立てられたであろうのに――もっとも別の意味で〝民族意識〟なら、かれらにも溢れんばかりに具わっていた――。アリストテレスは『政治学』でこう宣言している。もしもギリシア人が一つにまとまっていたら、世界も支配できたであろうに、と。このような発想はしかし、あくまでも抽象的な哲学問題としてギリシア人の心に浮かんだにすぎない。それでもペルシア戦争後に一度――それも一度きり――ギリシアの国民感情は、独立を求めるデモステネスの最後の戦いでどっと盛り上がり、異国の敵に向けて足並みを揃えた抵抗の中で、現実の政治行為と

なった。ポリスは、みずからの生命と理想を守るべく、衰えつつある自身の力を――これを最後として――結集した時期に、デモステネスの演説の中で〝不滅化〟された。政治的雄弁は、あまたの称賛とあまたの罵りを共に浴びていたが、支えるべき〝理想〟と切り離しがたいものとして、今や再びこれらの演説で最高の意義と価値にまでのし上がり、次いで、衰退して消え去った。そうした雄弁の最後の大いなる戦いこそ、デモステネスの卓抜な『冠について』にほかならない。この演説が的を絞るのは〝実際政治〟でなく、あの酷評される歳月を貫いてアテナイを導いた人物（＝クテシポン）の個人的性格がどう変遷したかをめぐる〝判定〟であった。ほとんど最後の息を引き取るまで、いかにデモステネスが、みずからの理想のために闘っていたかを目にするのは、感激この上ない。このような演説を評して、歴史の指が書き上げてどんどん先へ進んでから、最後の言葉を口にする類いの〝努力〟に異ならない、などと考えるのは〝大きな間違い〟にちがいない。かれの旧敵の面々はしかし、みずからのネズミの穴から忍び出て、歴史の名の下に、かれへの最終評決を下そうと企てた。かれはだから、これを最後として立ち上がり、アテナイの人びとに、そもそもの始めから自分が何を為そうと努め、実際に何を為し終えたか、を告げないわけにはいかなくなった。ピリポス弾劾の四演説に目を通してはっきりと目撃されるこの闘いは、重い過去、いや増す危険、辛い決定のすべてを介して、今や再びわれわれの前に、宿命的な終焉で完結する〝歴史〟として立ち現れる。デモステネスは、みずからの経歴をそう弁解しているように〝悲劇的な人物〟にほかならない。けれどもかれは、アテナイの人びとに説き勧めて、あなた方の歴史があなた方に求めた以外の決定をどうかしないで貰いたい、と訴えた。アテナイの栄光は、今一度かれの言葉で輝き出て、あまたの苦悶にも拘わらず、まことに調和的な曲調の中で静かに幕を閉じる・・・

訳者あとがき

ここに紹介した和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な、G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —,Oxford,1939 をテキストにしている。イェーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意訳性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が〝様変わり〟するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。

今回は、紙数の制約もあって、PAIDEIA（Book Four : The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato（第四巻、プラトンの時代における教養理想のせめぎ合い),Oxford University Press,1971）から「11,Demosthenes : The Death-Struggle and Transfiguration of the City-State（第十一章、デモステネス：ポリスの死闘とその変容）」のみを掲載してみた。

（本学文学部非常勤講師）